

を書く。鳥に棒を一本足して「鳥」になる。それが今度は「𪗇」になり、「舌」を書き加えて「𪗇舌」になる。

これを順に見ると、まず「鳥」(kara su)の語源は「カーラは鳴き声、スはアッシリア語で鳥の意味」という説がある。また漱石はかつて建築家になろうと考えたことがあったが、製図用具のルーリングペン(ruling pen)は、ペン先が2枚の薄い鉄板から出来ているため日本語で「鳥口」と呼ばれる。そのrulingには「判決・政権・支配・与党」などの意味があり「亡父と欽吾」「母と藤尾」の思考の対立を連想させる。そして鳥は声が悪い。その悪声で甲高く鳴く鳥が「𪗇」であり、「𪗇舌」は「わけのわからない事をいう人を軽蔑する」という意味を持つ。すなわち倅の真意を信じず、回りくどく自分の身の処遇を案じる母に対する諦念である。

Ⅲ. 三つ鱗

これは桓武平氏の末裔：北条家の家紋であると同時に、同じ血を引く甲野家の家紋である。『退屈の刻を、数十の線に劃して、行儀よく三つ鱗そとがわを塗り潰す子と、尋常に手を膝の上に重ねて、一劃ごとに黒くなる円の中を、端然と打ち守る母とは、かんよう威雍の母子である』『亡き人の肖像は例によって、壁の上から、閑静なるこの母子を照らしている』『丹念に引く線は漸く繁くなる』そこへ藤尾が現れる。



北条家の三つ鱗



甲野さんが描く三つ鱗（斜線の部分を繁く塗り潰していく）

北条家の三つ鱗は、北条時政が江の島弁財天に子孫繁栄を祈願したとき、美女に変身した大蛇が神託を告げて去ったという「江の島伝説」に由来する。

甲野さんが、結婚は『まあ藤尾の方から極めたら好いでしょう』と言ったときに書いているのは、まだ三つ鱗の三角だけである。その三角は欽吾と母と藤尾の親子である。然し母の話聞いて『藤尾へは養子をするつもりなんですか』と言ったあと、母に電話で藤尾を呼ばせ、待っている間に黒い線で埋めるのは三つ鱗の内側ではなく外側である。ここで漱石は「そとがわ」に「外部」という字を当てている。これは外部の人間（小野さん）を養子に迎えて家督相続を目論む大蛇を待ち受けての思案である。

そして漱石の小説中に名が挙がるドストエフスキーの作品に「骨肉の争い」を描いた『カラマゾフの兄弟』(Братья Карамазовы)という小説がある。この「カラマゾフ」には「黒く塗り潰す」という意味があるそうだ。そこから考えると「骨肉の争い～カラマゾフの兄弟～黒」とつながる。それは「自分たちの都合による黒い陰謀」ということになり、藤尾と母の都合の策略を暗示する。また「陰謀」といえば、この小説の冒頭に出てきた桓武天皇に関わる陰謀「京都の黒い影」を想起させる。ストーリー進行中に当初の意味を再認識させるということは、ここで小説はいよいよ総括段階に入るのだろう。次章で宗近君（アレキサンダー）が未来へ向かって動き出し、次に欽吾（レオパルディ）が決意し、浅井の法の擁護はなく、第三章：京都の場面に持ち出されたゴージアン・ノットに回帰し、小野と藤尾の関係は断たれる。(2014.1.9)